

(報道資料)

担当：円仏教思想研究院

モシヌン・サラムドゥル哲学スタジオ『韓国社会 COVID19 市民白書』刊行

世界はなぜ韓国に注目するのか！

コロナウイルスにたいする成功的対応によって、全世界の耳目が韓国に集中している中、地球市民の立場から COVID-19 を総合的に眺望した市民白書の刊行が、注目を集めている。図書出版モシヌン・サラムドゥルの「哲学スタジオ」が企画した『世界はなぜ韓国に注目するのか - 韓国社会 COVID-19 市民白書』がそれだ。今回の新刊を企画した「哲学スタジオ」は、円光大学円仏教思想研究のホ・ナムジン（許南診）研究教授、ジョウ・ソンファン（趙晟桓）責任研究員、延世大 X-メディアセンターのイ・ウォンジン（李圓珍）研究員などから成る小規模の「人文コンテンツ企画室」である。今回の新刊は<ニューノーマル>時代にふさわしく、オンライン空間で高度な集中力を発揮して企画された。

国内で最初の感染者が発生してから、正確に 99 日目に出されたこの「市民白書」は、巻頭に掲げられた<企画者のことば>からわかるように、「パンデミック状況を通じて韓国社会とグローバル社会をふり返って見ること」に主たる目的がある。この企画意図をイメージ化したものが表紙のデザインである。真ん中に「マスクをつけた地球」が描かれ、下段には「付き従う学習者から先導する創造者へ！」というスローガンが記されている。たとえ「マスク」をつけていても「青く」浄化された地球の姿が、コロナによって悲喜こもごもの人間と自然の「ニューノーマル」を象徴している。下段の文句は、今回の対応によって、韓国の位相と韓国人の意識が Learner から Creator に転換していることを強調している。

内容的にも多様で、第 1 部<災難と国家>からはじまり、第 2 部<災難とメディア>、第 3 部<災難と公共性>、第 4 部<災難と日常>、第 5 部<災難と宗教>、第 6 部<災難と人文学>にいたるまでに、各分野にわたって総合的にコロナ事態を眺望している。具体的には、韓国の成功的対応にたいする総合的分析と海外メディアの評価をはじめ、危機的状況で発揮された韓国人の公共性、宗教界に投げられた課題、コロナによって触発された日常の変化、非正規職労働者らの生計の脅威、新天地事態に現れた霊性の危機など、20 代の大学生から 50 代の平和活動家にいたる多様な観点と見解が網羅されている。それだけでなく、日本、中国、ヨーロッパの状況にたいしても、円仏教思想研究院の柳生真研究教授と中国で活動する「和 & 同青春草堂」のキム・ユイク代表、スイス在住の元中央日報キム・ジンギョン記者が生き生きと伝えている。

今回の新刊によって、コロナ 19 が韓国社会とグローバル社会に投げかける「メッセージ」は果たして何なのか、その大略を掴むことが期待される。